連載コラム

みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第31回
スイセンの仲間

もとよし　ふさお
本吉 總男

2017 年 3 月

スイセンはヒガンバナ科の植物として分類されています。ヒガンバナとは外観がまるで違うのですが。ヒガンバナ科植物には、スイセンやヒガンバナの他に、アガパンサス、スノードロップ、タマスダレ、ナツズイセン、アマリリスなどの園芸植物があります。野生種では、キツネノカミソリがよく知られています。最近、ネギの仲間（ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニクなど）もヒガンバナ科に入れられました。

今回は、早春の花、スイセンについて述べることにします。

1　スイセンという植物

スイセンという和名は二通りに使われます。狭義には、中世の頃から日本で栽培され、また自生している種の名称です。これは通常ニホンスイセン（日本水仙）とも呼ばれています。学術的な名称ではありませんが、ニホンスイセンと呼ぶ方が名称の混乱を防ぐことができます。広義のスイセンは全てのスイセンの仲間に対する包括的な名称です。ここでは、狭義のスイセンは「ニホンスイセン」と呼び、スイセンの仲間全般には広義の「スイセン」を使うことにします。

スイセンには、フサザキズイセン（房咲き水仙）のように1本の茎に複数の花が付くものと、ラッパズイセン（喇叭水仙）のように1本の茎に花がひとつだけ付くものがあります。まず、スイセンの基本的な花の構造について述べてみましょう。

花は一般に、萼、花冠（花弁の集合）、雌しべ、および雄しべによって構成されています。また、萼と花冠を合わせて花被と呼びます。通常の花では萼と花冠がはっきり区別できますが、スイセンの花では萼も花弁のように変化して、区別しにくくなっています。したがって花弁と萼は区別せず、花被片と呼んでいます。スイセンの花にはまた、副花冠という特殊な器官（中央のカップ状の部分）があります。

スイセンの仲間は花被片と副花冠をもつ

スイセンの仲間は約30種あり、いずれも地中海沿岸の地に原産しています。それらの原種のうち6種から数多くの園芸品種が作られました（週間朝日百科『世界の植物』98号）。われわれが目にするスイセンのほとんどは園芸品種です。

2　ニホンスイセンのこと

ニホンスイセンは、地中海沿岸に原生するフサザキズイセンの変種です。地中海沿岸からはるばる東洋まで旅をしてきた途中、原種のフサザキズイセンがどこでニホンスイセンに変異したかはわかりません。フサザキズイセンはヨーロッパや西アジアで栽培されるようになり、それがシルクロードを通じて中国に運ばれ、のちに日本に伝搬されたものと考えられます。中国に伝来したという確かな記録は唐代（9世紀）の文献にあり、日本での栽培の記録は室町時代（15世紀）の文献にあるそうです（北村四郎選集3『植物文化史』保育社）。

ニホンスイセンという名は「日本特有のスイセン」というように思われがちですが、中国のものと同種です。ニホンスイセンには種子はできず、もっぱら球根によって繁殖します。

ニホンスイセンは最も普通に家庭の庭などで栽培されているスイセンだと思いますが、みずき野周辺の公園や花壇や道端では見た記憶がありません。

ニホンスイセンは房咲きで、花は白い花被片（かひへん）と黄色い小さな副花冠（かかん）をもっています。わが家の庭でも咲きますが、不覚にも写真を撮ったことがなかったので、以前に描いたスケッチを載せておきます。

ニホンスイセン

ニホンスイセンはもっとも早咲きのスイセンで、12月～2月に咲き、正月の生花にもよく使われます。草花の少ない時期に咲くニホンスイセンはみずき野町内の公園や花壇にも欲しい植物です。

3 スイセン園芸品種の分類

スイセンはその容姿や花の美しさから、原種から多くの園芸品種が作られました。週間朝日百科『世界の植物』98号には、「イギリスの王立園芸協会（Royal Horticultural Society）には現在1万を超える品種が登録されている」と述べられています。ここで現在というのは1977年のことなので、もう40年も前のこと。最近の情報を知りませんが、膨大な数の品種が存在することは想像できます。園芸品種を見ただけで、品種名を知ることは至難のわざです。

王立園芸協会では、スイセンの園芸品種を12のクラスに分けています。（Horticultural Classification ←英語のサイトですがイラスト付きで違いが分かりやすくなっています。）

このなかで、みずき野周辺で栽培されているものは、Trumpet Daffodil Cultivars（ラッパズイセン）、Large-cupped Daffodil Cultivars（タイハイズイセン、大盃水仙）、Small-cupped Daffodil Cultivars（ショウハイズイセン、小盃水仙）、Double Daffodil Cultivars（ヤエザキズイセン、八重咲き水仙）および Tazetta Daffodil Cultivars（フサザキズイセン、房咲き水仙）に属するものがほとんどと思われます。5、6 ページに写真を載せています。

ラッパズイセンは副花冠（かかん）が花被片（かひへん）の長さと同じか、もっと長いもの。タイハイズイセンは副花冠（かかん）が花被片（かひへん）の長さの3分の1以上から同程度までのもの。ショウハイズイセンは副花冠（かかん）が花被片（かひへん）の3分の1以下のものと定義されています。いずれも1本の茎に花がひとつ付きます。

4 みずき野周辺でのスイセンの散策

もうだいぶ以前になりますが、本町地区の畑のへりや道端に植えられているいろいろなスイセンを散歩しながら写真に撮ったことがあります。主にそれらの写真を次に並べてみます。

(1) ラッパズイセン

3月下旬　本町地区

3月下旬　本町地区

(2) タイハイズイセン

3月下旬　本町地区

3月下旬　わが家の庭

(3) ショウハイズイセン

3月下旬　本町地区

(4) ヤエザキズイセン

3月下旬　本町地区

3月下旬　本町地区

(5) フサザキズイセン

3月下旬　本町地区

3月下旬　本町地区

1月下旬　さくらの杜公園

(6) 分類できないスイセン

3月下旬　本町地区

この写真のスイセンは房咲きの品種ですが、黄色い花被片（かひへん）を持っています。

通常のフサザキズイセンは花被片（かひへん）が白いので、この品種は園芸分類上のフサザキズイセンかどう分かりません。

●● 余談：スイセンに因んで ● ●

スイセン、すなわちニホンスイセンの季語は冬となっています。ニホンスイセンは12月～2月に開花します。

ニホンスイセンが日本に渡来してからは、スイセンといえばニホンスイセンのこと。したがって、スイセンの季語が冬でもおかしくありません。芭蕉や蕪村の句に詠み込まれたスイセンも真冬の情景を感じさせるものです。

はつゆきや　水仙のはの　たはむまで　　松尾芭蕉

この芭蕉の句には花は出てきませんが、葉だけではスイセンであることは多分わからないので、花は当然咲いていたと思います。

水仙や　寒き都の　ここかしこ　　与謝蕪村

宮沢賢治は生前に唯一、童話集『注文の多い料理店』を出版していますが、その中に「水仙月の四日」という短編が載っています。冷酷な冬の魔女、雪婆(ゆきば)んごが3人の雪童子(ゆきわらす)を使って、猛吹雪を起こさせ、一人の子供を遭難させます。子供は雪童子(ゆきわらす)の計らいで助かります。「水仙月(すいせんづき)」とは宮沢賢治の作り出した月名ですが、厳冬の季節を連想させます。雪童子(ゆきわらす)は空に向かって歌います。

♫ カシオピイヤ、
もう水仙が咲き出すぞ
おまへのガラスの水車(みずぐるま)
きっきとまはせ ♪

ニホンスイセンは真冬の花ですが、ラッパズイセンなどは3月中旬頃から咲き始める春の草花です。季語も春となっています。

スイセンの仲間は英語でナルシサス（Narcissus)、またはダフォディル（Daffodil)と呼びます。Narcissus はスイセン属の学名としても使われています。

後1世紀のローマの博物学者プレニウスによれば、Narcissus はギリシャ語の Narce（麻痺させる、眠らせる)に由来する名だそうですが、前1世紀～後1世紀のローマの詩人オウィディウスは『変身物語』に、美少年ナルキッソス(Narkissos)は水に映る自分の姿に恋い焦がれて死に、スイセンに変身したとあります。Narcissus の名はその Narkissosに由来するのかもしれません。

Daffodil の名はギリシャ神話に出てくる冥界(めいかい)に咲く花の名、アスポデル（Asphodel）に由来しています。アスポデルという植物はホメロスの『オデュッセイア』に、主人公オデュッセイが冥府(めいふ)を訪ねる話の中にも出てきます。ただし、実際にはアスポデルはツルボランというスイセンとは全く異なる植物です。Daffodil は Asphodel から作られたオランダ語、de affodel が直接の語源と思われます。

追記：スイセンは有毒植物

スイセンの仲間はアルカロイド有毒植物です。間違って食べると、嘔吐や下痢などの中毒症状を引き起こします。葉がニラの葉と似ているので、ニラと間違って食べて中毒したという例がいくつもあるようです（厚生労働省ホームページ「自然毒のリスクプロファイル：高等植物：スイセン類」より）。また、フサザキズイセンは皮膚炎を起こすことも知られています。生け花にフサザキズイセンを使う時には、切り口から出る汁液（じゅうえき）が皮膚につかないように注意することが肝要です。